



TITLE:

隕石を尋ねて兵庫縣へ

AUTHOR(S):

山本, 一清

CITATION:

山本, 一清. 隕石を尋ねて兵庫縣へ. 天界 1927, 7(81): 502-502

ISSUE DATE:

1927-11-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/161208>

RIGHT:

隕石を尋ねて兵庫縣へ

山 本 一 清

去る十一月一日、自分は兵庫縣野口村小學校の大西氏から手紙を受取つた。中には、

「去る十月十八日午後九時十分頃、當校の南約五丁の所に隕石が一つ落ちました」云々

こいふ文句があつた。少し通知が遅過ぎることは思つたが、こにかく、行つて見たいものだと思ひ、同日午後の汽車で西に走つた。

午後三時過ぎ加古川驛に下車、それから半里の道程を自動車で、野口小學校に赴き、校長こ大西訓導こに案内されて、同村大字古大内の乾治坤氏宅を訪れた。治坤氏の令妹範子氏が去る十八日の夕暮、門前で二人の朋友こ話しながらしてゐられた時、突然異様な音響がして、門の傍の雑木の茂みへ何ものが落下したのであるこいふ、自分は範子氏に一通りの記憶を聞きたゞして見たが、同女は當時非常な驚きこ怖れこを以つてまつしぐらに家の中へ馳け込んだこいふのであつて、其の觀察には可なり不完全な點があり、又、何ものが落下したこいふ雑木の叢は可なり廣くあり、時も日没に近づいたので、自分はすぐ掘り返す勇氣も無く、あこを校長によろしく御依頼して一先づ引き上げた——十月十八日のほゞ同じ時刻に、大西氏は自宅の外に立つて乾氏の宅の方向に一大流星を見たこ言つて居られるが之れが果して乾氏宅に落ちたものこ關係があるか否か、多少の異ひがある但し同夜は珍しい晴天であつた由。

さうも此の隕石落下事件は、通知が遅れたのが大失敗の一つであつたやうに思ふ。それに觀察者が全くの素人で、單に驚駭した以外に、ほこんご確かな事を覺えてゐないのだから残念である。之れも落下のすぐ翌日あたりならばもつこ印象が鮮かで、多少の手がゞりを得たかも知れない。

將來、讀者も一般に御注意を望む。